

生態学的意味論

—主体的意味論としての生態学的意味論—

岡 崎 敏 雄

I. はじめに

本論は、第一に、生態学的意味論の定義、構成、根本概念である意味の生成及び意味特性の規定を提示し、第二に、アフォーダンスの認知意味論を取り上げ、そこで意味はどのように従来の意味論を超えた地平で新たに捉えられているかを見る。その上で、生態学的意味論に基づき、生態学的意味論の根本概念の一つである生態場の視点からアフォーダンスの認知意味論を捉え返す。第三に、これら二点を踏まえ、逆規定の捉え方を契機とする主体的意味論としての生態学的意味論について考察する。

II. 生態学的意味論

1. 生態学的意味論の定義

生態学的意味論は、直接的には、直面する人間生態系における人間生存の危機を契機とし、根源的にはそれを規定する自然生態系上の危機、即ち生命存在一般がもつ本性としての「生存の危機」性及び、それを克服して生存を継承していく相を対象化し、その過程で開示されてくる意味の生成過程と構造を明らかにする学である。

かかる生態学的意味論は、以下のような生態学の見方に基づいて展開される。生態学は、自然生態学、(言語生態学を含む)人間生態学の違いを問わず、何れも生命、非生命間の相互交渉的関係の形作る自然生態系・人間的な自然生態系の下にある生存のありようとその基盤を問う学である。即ち、生物、人間の生存の諸相、その基盤を支える構造、過程を問う学である。具体的には、「生存」に関わる問題を包摂する問いである「(自然生態系・人間的な自然生態系界を包摂する)自然界は如何なる相をなしているか」の問い、及び「その下で人間を含む生命体はどのように生きてあるか」の問いを、現実生態場の下にある人間的な自然主体が追究する学である。

このうち、言語生態学における生態学的意味論は、「生存」に関わる問題を包摂する上記二つの問いを基軸として求められるものを意味として位置づける。このように生態学的意味論が意味を、明示的に、自然生態系・人間生態系を包摂するものとして捉えるのは、言語生態学が、前提として、言語を人間生態系のものものとして限定せず、自然生態系総体を形作るものとして捉えることによる。

このうち、自然生態系を形作る言語とは、分子言語・ゲノム情報・細胞シグナル伝達・

植物、動物の相互個体間シグナル伝達・素粒子のゲージ場におけるインターアクション・宇宙、高エネルギー情報等の形態をもち、自然生態系と共進化する言語である。このような自然生態系・人間生態系との内在的関係のもとにある言語を捉える学としての言語生態学は、一方で、自然生態系・その領域としての人間生態系と、他方、それぞれを内在的に形作る言語生態系との相即的相互形成的過程と構造を記述・分析し、またその記述・分析に基づき保全・育成を図る学である。

言語生態学は、人間言語（即ち人間的・自然的・固有の人間的自然言語生態系）を対象とする場合、次のような人間的・自然的生存の危機の構造化の結果、意味の崩壊に直面する21世紀の下で、問われる「生存」に関わる問いによって求められるものを意味として位置づけ、意味論の対象とする。

1989年ベルリンの壁崩壊、1991年ソ連解体以降の社会主義圏の崩壊を構造的契機として国家の壁の瓦解は「東西」それぞれの相貌の下に進み、全世界は一気に、諸規制の緩和による資本・金融・貿易の自由化、その帰結としてのグローバル化世界へと変貌した。それは自然・人間の生存基盤構造を揺るがし、代わりに生存の危機の構造化をもたらした。即ち、資本・金融・貿易の自由化による雇用の危機、食糧を安定的に獲得できる人口の減少、それを補償すべき社会保障の脆弱化、三者に伴う生存構造の縮退である。

その凝縮された形が、世界の飢餓人口の加速である。1990年代の10年間、世界の飢餓人口が8億から8億3千万に増加した。10年間で3千万の増加のペースである。これに対して、21世紀、2007年のサブプライムローン危機から2008年リーマンショック後の1年間に飢餓人口は8.5億から10億に増加した。1年間に1.5億の増加のペースに加速した。世界の6—7人に一人が飢餓の下にある。これは予測にとどまっていた「2050年総人口90億見込みのうち30億、つまり3人に一人の飢餓」が現実化に向かっている状況といって過言ではない。

これは早魃など自然災害によるたまたま起こった飢餓ではない。構造的飢餓である。生存の危機の構造化の顕在化した帰結としての飢餓人口の拡大である。

そのような状況の克服に向ってどのような方向性をもって生きるべきかに関わる「生きるためのスキーマ」（岡崎 2009 b）が崩壊している。またその下で「生きる意味」も不透明化し、過去から今に至る現実が送り込んでくる状況を受け止め、それを捉え返し、そして未来に向って投げ返すこと、即ち、「被投的投企」に向けた実存あるいは意志が不在である。その下で意味の不在あるいは崩壊が進行している。そこでは、10億の飢餓の当事者と、自己をその当事者であると捉えていない（67億のうちの10億以外の）人の直面する状況が、自分もその一員である人間生態系の危機として捉えられていない。その結果、人間生態系の危機という事態の把握、及びそれを形作るべき生存、生命を始めとする諸概念の形成の不在として意味の崩壊が進んでいる。今世紀に先立つ20世紀は「世界の存在の意味を問う世紀」と呼ばれた（木田 1996）。上記の世界の状況は、今世紀が「意味の崩壊の21世紀」であることを物語っている。それも、今世紀が人間、人間生態系にとって最も根源的なものとしての「生きることに関わる意味の崩壊

の21世紀」たることを示している。

このように、21世紀は生存の危機の構造化が進行している世紀である。21世紀の学は、この生存危機の構造化を対象とし、その克服を課題とするものでなければならない。即ち、その克服を学的課題として持つものが学的妥当性を有する。具体的には、第一に、生存危機の構造化の克服課題を追求する学は、生存のあり方を分析・記述し、なおかつそのあり方の不全部を保全・育成することを追求するものでなければならない。即ち、上に取り上げられた雇用・食糧・社会保障の危機の構造化に対する自然・人間両生態系上の生存追求の学が求められている。同時に、雇用・食糧・社会保障の危機の構造化の認識・実践・及びその克服に対する被投的投企の意志・実存に基づく意味の生成による克服過程を創出する意味の学、生きるための意味の生成過程を明らかにする学としての言語の学が求められる。このような学としての言語生態学の中核部分をなすものが生態学的意味論である。それは、第一に、直面する人間生態系上の生存の危機を契機とし、その先に、根源的に存在する自然生態系上の危機、即ち生命存在一般がもつ本性としての「生存の危機」性及びそれを克服して生存を継承していく相を対象化し、第二に、その過程で開示されてくる自然生態系全体を領域とする意味の生成過程と構造を明らかにするのが総体としての生態学的意味論である。

2. 生態学的意味論の構成

(1) 生態学的意味論の構成の前提その1：自然に普遍的・本質的な存在としての言語

生態学的意味論の構成は以下の三つの存在を前提とする。第一に、自然生態系、人間生態系両者に共通して普遍的・本質的なものとして言語が存在する。即ち自然生態系には自然言語が、人間的生態系には自然言語の一部をなすものとしての人間的な自然言語が、固有の形態を持って存在する。

(2) 生態学的意味論の構成の前提その2：自然に普遍的・本質的な存在としての認識

第二に、言語と同様、自然生態系、人間生態系に共通して普遍的・本質的なものとして認識が存在する。即ち自然認識、人間認識がそれぞれ固有の形態を持って存在する。自然生態系を構成する物質においては、物質的自然における認識が存在する。例えば、アミノ酸のL型の種類はD型の種類との間で、お互いを識別し、異なる型同士ではタンパク質を形成しないという分子認識が存在する。また、酵素は特定のタンパク質との組み合わせでしか反応しないという物質的自然における認識が存在する。生物的自然のレベルでは、アメーバは触手、偽足による触覚によって近くにある物体が、食用にあたるか否かを認識し、免疫細胞は細胞外からのウィルス等を非自己と認識しこれを排除の対象とすべきものとして認識する。多細胞生物においても空間認識はもちろん、固有の生物時計を媒介とする時間認識を持ち、蝶は固有の蝶の道を辿って餌を探し、産卵する場所を特定する認識を持つ。

後に述べるように生態学的意味論では、言語主体にとって対象となる事物・事象が如何なるものであるか、即ち「何として捉えられるか」を示すものが意味である。この「と

して捉えられるか」をつかさどるものが認識である。従って、自然生態系・人間生態系に共通する言語はもとより、認識もまた生態学的意味論そのもの及びその構成の前提となる。

(3) 生態学的意味論の構成の前提その3：生態学的意味の生態系

第三に、自然生態系・人間生態系両者にわたる言語及び、認識が形成する意味について、次のような三系列の意味が形成する意味の生態系が存在する。即ち1. 自然言語固有の意味、2. 自然・人間間の対話由来の意味、3. 人間言語固有の意味である。このうち1.の自然言語固有の意味は、人間が直接的に把握することはできず、自然科学、農林水産業上、非専門の実践・観察・実験・メタファー思考・アナロジーなどの認知・認識を媒介としてなされる2.の自然・人間間の対話を介して捉えられる。

(4) 生態学的意味論の構成

以上の前提を踏まえ、生態学意味論は、三系列の意味、即ち、1. 自然言語固有の意味、2. 自然・人間間の対話由来の意味、3. 人間言語固有の意味それぞれに対応する意味論によって構成される。

従来、言語学において展開されてきた意味論の多くは第三の系列の意味に対応してなされてきたと言える。これに対して、生態学的意味論は、生態学の対象とする自然生態系と人間生態系両者を包摂し、その両者に共通する普遍的・本質的な言語の意味を対象とする。また、同様に両生態系に渡る認識を介して「として捉えられる」を示す意味を対象とする。従って、三系列全てに対応する意味論によって構成される。

3. 生態学的意味論の根本概念：意味の生成－自然の自己認識・自己実現の過程としての意味生成の過程－

生態学的意味論においては、意味はアプリアリには与えられない。意味は一定の契機に応じて生成されるものとして捉えられる。

また、意味は自然史各段階・各水準において固有の形で生成される。即ち、1. 物質的自然段階・水準、2. 生物的自然段階・水準、3. 人間的段階・水準でそれぞれ固有に生成される。意味生成の過程とは、自然の自己認識・自己実現の過程である。自然全体が、人間的な自然にとって対象として捉えられる総体としての自然即ち物質的自然と生物的自然からなる対象的自然と人間的な自然間の相互交渉の関係生成の過程を通じて、全体としての自然の自己認識・自己実現の過程を辿る。本論では、このうち対象的自然と人間的な自然間の相互交渉の関係生成としての意味生成について考察する。

(1) 対象的自然と人間的な自然それぞれの自己認識・自己実現

対象的自然の自己認識・自己実現は、人間的な自然の形成以降の過程においては、対象的自然が自らの内に人間的な自然を内在化させ、それとの相互交渉の過程におけるその自己認識・自己実現を媒介としてなされるものとして捉えられる。生産・労働を主軸とする相互交渉の過程を通じて、人間的な自然は自身の意識生態場において、対象的自然の諸相が如何なるものであるかを認識する。こうして得られるものが、人間的な自然を媒介と

して得られる対象的自然の自己認識である。その認識を契機として、人間的自然による対象的自然に対する働きかけである生産・労働を通じて媒介的に、現実生態場（IIIの1を参照）において実現されることによって、対象的自然の自己実現がなされる。

他方、人間的自然における自己認識・自己実現は、生産・労働を通じて、そこに出現する生産物を獲得することによって、一方で、対象的自然の実現とともに、他方で、自己の投入によって新たな対象的自然内の生産物として昇華された形で、自己実現がなされる。同時に、人間的自然は、その過程で、新たな対象的自然内の生産物に、投入された自己の実現を得ることで、そのような生産及び生産物の獲得をもたらしうる、また実際にももたらしたものとしての自己の認識を獲得する。

(2) 自然の自己認識・自己実現としての意味生成の段階的契機—人間的自然の場合—

人間的自然段階・水準では、人間的自然を含む現実生態場において、意味は段階的に生成される（岡崎 2009c, d）。その各段階の契機をなす能動的認識・実践・意志形成／実存の主体的規定／自覚のそのつど、自・他即ち人間的自然・対象的自然の新たな規定として、意味は生成される。即ち、それぞれの段階的契機において自己と世界の新たな関係が規定され、そのもとに新たな自己と、新たな世界の意味が開示される。その点で、意味は、意味生成の段階的契機それぞれにおいて形成される自己と世界の意味の相即性のもとに生成されるものとしてある。

(3) 言語生態場においてなされる意味生成

対象的自然と人間的自然の、相互交渉の関係生成としてなされる意味生成の場合は、意味は、人間の内的言語生態場（同上参照）において、人間的自然言語を媒介として生成される。また、人間的自然相互の間で交わされる言語を媒介とする場合は、外的言語生態場（同上参照）において生成される。

(4) 自然の自己認識・自己実現としての意味生成における実体上の段階・水準

以上に見る対象的自然と人間的自然の相互交渉の関係生成としてなされる自然の自己認識・自己実現としての意味の生成は以下のような自然史過程全体の意味生成過程の一環としてなされる：1. 対象的自然と、物質的自然段階・水準間の相互交渉の関係生成、2. 対象的自然と、生物的自然段階・水準間の相互交渉の関係生成、3. 対象的自然と人間的自然段階・水準間の相互交渉の関係形成。

(5) 物質的自然・生物的自然段階・水準の意味生成

物質的自然・生物的自然段階・水準における、自然の自己認識・自己実現としての意味生成は、自然言語を媒介としてなされる。両段階・水準においては、それぞれの「意識」生態場（同上参照）におけるそれぞれの内的言語生態場・外的言語生態場において、物質・生物的自然言語を媒介としてなされる。ただし、人間的自然がこれらの意味にアクセスするのは、「自然との対話」、即ち、自然科学、農林水産業の知見を媒介とする観察・実験・推論やメタファー的思考、アナロジーによって上記両段階・水準の自然を把握することによる。

Ⅲ．生態学的意味論—人間言語の生態学的意味論—

本論では、生態学的意味論の中、まず人間的・自然言語生態系における意味を対象とする人間言語の生態学的意味論を中心に考察する。以下特に断らない限り、人間言語について論究する。

1. 意味の生態学的生成 ecological genesis : 生態学的意味は、言語主体の生態場が実践生態場として生成される下で生成される。

(1) 生態場

生態学においては、個々の人間即ち自己及び人が生き、人間生活を形づくっている「今、ここ」の場を現実生態場として捉える。現実生態場とは、人間が自己もその一部を成し、その上で直面している社会及び自然の形作る現実世界の現相である。一方、現実世界を構成する人間の意識内に形づけられるのが意識生態場である。「現実世界がどうなっているか」の問いをきっかけとして形づくられていく「現実世界の能動的認識」の過程が、この意識生態場の中に、認識生態場として形成されていく。

現実生態場であって、個々の人間の認識生態場で形成される内容を、相互にやりとりすることによって現実生態場での人間諸活動を円滑、かつ効率的に進めることを目指す言語活動によって形づけられるのが言語生態場である。

以上を大きく捉えると、まずは個々の人間が生き、その下に置かれている二つの生態場、一方の現実世界に対応する現実生態場、他方の個人の意識内世界に対応する意識生態場の両者がある。現実生態場には言語生態場、意識生態場には認識生態場が形づけられる。

以上のマクロな構図を捉えた上で、言語生態場については、現実生態場の中に形づけられる外的言語生態場と、意識生態場に作られる認識生態場の中にも内的言語生態場が形成される。

外的言語生態場は、現実生態場の下にある人と人との間の外的やりとり、即ち社会的相互作用をなすやりとりが生み出す生態場である。これに対して、内的言語生態場は、典型的には自問自答のように人が認識内で行なうやり取りが生み出す生態場である。また意識生態場の中で形づけられる「世界(即ち社会及び自然、)の能動的認識」の「認識(即ち、社会及び自然に関する認識)」は、言語を媒介としてなされる。但し、ここでの「言語」は、上記の外的言語生態場で、人と人との間で現実の発話の形または文字の形でやり取りされる言語(これを外的言語と呼ぶ)とは異なる。外の現実ではなく、人の意識の中における「言語」である。その意味で内的言語と名づけられるものである。

このように言語生態場には、一方で現実生態場の中に形づけられる外的言語生態場と、他方の意識生態場の中に形づけられる内的言語生態場の二つがある。

以上の生態場の構成は次の三段階を辿って新たに実践生態場を持つ。即ち、第一段階として、認識生態場において現実世界の能動的認識の過程が形成される。その端緒の契機は、被与・能与、直接的・間接的あるいは意識的・無意識的など多様な実践である。第二段階として、現実世界の能動的認識に基づいた上での実践が形作られ、認識内容を

実現する現実相が獲得される。さらに、第三段階として、第一、第二段階の循環的蓄積を辿る中で、その個人が直面して生きている「今、ここの現実生態場」を超えてそのような次の「今、ここ」即ち「未来の生態場」を、どのようにして形作るかの具体像が形成される段階に至るとき、その個人にとってその現実生態場は、同時に、それ以前の現実生態場とは異なる性格を新たに付与された生態場、実践生態場として存在し始めるものとして捉えられる。

この実践生態場の生成に至る各段階で注目すべき点は、その各段階で併行して、世界の能動的認識、その認識が現実相を獲得する実践、さらに最終段階の実践生態場の各形成過程で、それぞれ言語のもつ意味の性格が新たなものになっていくという点である。

即ち、言語主体の生き方が、実践生態場の生成に至る各段階に対応して新たなものとして形作られるのに伴い、その言語主体の言語のもつ意味のあり方も各段階に応じた変容を遂げていく。言語主体の新たな生き方即ち新たな人間生態に応じた新たな意味のあり方が、生き方を形作る認識、実践、現実世界（＝現実生態場）下の諸関係、を主体とする関係総体の中に織り込まれて、新たな生態学的関係の中に形作られる意味の生成として段階的に変容を遂げていくのである。これが生態学的意味の生成である。

この前提となるのは、言語は人の生き方、即ち人間生態との関わりなしにその意味が成立しない、という生態学における言語の意味に関する見方である。即ち、人の生き方と結び付けられることではじめて言語の意味は生成される、という見方である。

以上の生態場の大きな鳥瞰図は言語生態と人間生態が相互に緊密な関係を形づくっている内的構造を鮮明に示している。即ち、現実生態場と意識生態場が合わせて形成する人間生態全体の中に、言語生態は、外的、内的言語生態場の中に形成されるものとして位置づけられ、全体として生態場をなしているのである。この生態場に新たに実践生態場が生成されることで、生態場全体即ち人間生態全体とその中に位置づけられる言語生態は、新たなステージに移行する。それが即ち以下に述べる、生態学的意味の生成されていく下での人間生態、言語生態のステージである。このステージは同時に、また、言語の形骸化、融解（岡崎 2009a）の保全された人間生態、言語生態のステージである。

(2) 生態場が実践生態場として生成されるための過程

生態場が実践生態場として生成されるためのより詳細な過程は、次のようなものである。

現実生態場（＝現実世界）に対する能動的認識の過程が意識生態場内の認識生態場において形成される。（意識生態場は、現実世界を構成する人間の意識内に形作られる。）

その能動的認識の過程を通して、第一に、「世界はどうなっているか」、「人間主体としての自己はそこでどのように生きていくか」が捉えられていく。第二に、その中で、それらの問いに答える前提として、「この世界で生きていくために確保されるべき生態学的条件とは何か」、「それはどのようにして確保されるか」が捉えられていく。第三に、その「確保」のために、「何がなされるべきか」「どのように」が捉えられていく。

次に、その「なされるべきこと」、「方法」の具体像を獲得するのに、第一に「自分、

人が生きている今、この場」即ち、「今の生態場」に先立つ「過去の生態場」がどのようなものであり、それに対して「今の生態場」はどのようなものであるか、また、どのようにしてそこから形作られてきたか、第二に、「今の生態場」に基づき、「どのように」して「未来の生態場」が形作られていくのか、の具体像が形をなしていく。この具体像によって、「今の生態場」は、受け身的ではなく、より根源的に能動的に捉えられ、意志に基づく実践を媒介として「今の生態場」は、「未来の生態場」の具体像に変えられるべき能動的関わりの対象として捉えられる。

これらの具体像や能動的関わりは、三つの実践を契機として獲得される。第一に、自然との相互作用である「自己及び人の生存のためにものを生み出す実践」、第二に、それを媒介する自己と人との間の社会的相互作用である「ものを生み出す実践を進めるための自己と人との協働的実践」、第三に、両実践を媒介する（自然及び社会に関する認識を形づくる内的言語の形態と、社会的相互作用の契機を成す外的言語の形態の）言語的実践の三つの契機である。

以上の諸過程は特定の生起順ではなく、言語主体の置かれた生態場の個別性に応じた端緒から生起し、相互交渉的過程の中で生態学的過程を通じて形作られていく。

以上の全体を通じて、第一に、認識・実践を契機とする、「言語生態系と人間生態系、つまり言語と社会の生態学的生成」が形作られる。第二に、「言語生態系、人間生態系、自然生態系、つまり言語、社会、自然三者の生態学的生成」が形作られる。自然について見れば、自然は、それ自身で生成、発展するのと並行して、人間（という自然の一部をなすもの）が、自然というものが如何なるものであるのかを把握する認識とそれを形成する言語、また、その認識に基づき、他の人間との言語によるやりとりを媒介とする協働的実践それぞれを通じて、典型的には（食糧とされる）植物という形の自然として生成されるのである。

(3)「生態場が実践生態場として生成されるための過程」における生態学的意味の生成の構造

認識生態場における現実世界の能動的認識過程を通じて、言語の生態の内的生態環境である（「世界」、「生き方」に関する）概念のネットワークが新たなものとして創り出される。その場合、「個々の概念（内的言語）が言語主体の生きることと結びつけて抱えられる」ことを通して意味が成立する。これが生態学的意味の生成の第一段階である。

次に、概念のネットワークを形づくる各概念が一方で自己内対話を通して内的言語として機能し、他方で、外的言語として表現され、また、対話相手の外的言語化された概念が理解される中で、つきあわせられ、さらに実践を通じて、認識内容を実現する現実相が獲得され、それによって文字どおり自己の実践という形での自己の生き方とのつながりが形成されていく。これが認識・言語に基づく実践という現実相獲得にいたる過程における生態学的意味の生成である。これが生態学的意味の生成の第二段階である。

第一、第二段階を通じて、概念のネットワークは、「世界（＝人間生態系、より正確には、自然生態系と、その一部をなしているものとしての人間生態系）はどうなってい

るか」「そこで人間主体としての自己はどのように生きていくか」「この世界で生きていくために確保されるべき生態学的条件は何か」「それはどのようにして確保されるか」、その確保のために「何がなされるべきか」「どのように」、また「自己、人が生き直面している今、この生態場」に先立つ「過去の生態場」がどのようなものであり、それに対して「今、この生態場」はどのようなものであるか、あるいは、どのようにしてそこから形作られてきたか、さらにどのようにして「未来の生態場」が形作られていくか、の一連の「生態学的問い」に＜問い—答える＞を通じて、「今の生態場」が「未来の生態場」の具体像に変えられるべき能動の対象として捉えられることにより、新たな生き方の下に自己の生きることの諸相に結びつけられる。このような過程が生態学的意味生成の第三段階である。

この段階を通じて、概念のネットワークは「生きるための概念のネットワーク（＝生きるためのスキーマ）」として、またそれに基づいて、言語の意味が「生きるための意味」即ち生態学的意味として生成される。

この実践生態場における第三段階の意味の生成において注目すべき点は、ここでの意味生成が、「今の生態場」が「未来の生態場」に変えられるべき能動の対象として捉えられることを契機としていることである。実践生態場成立以前、つまり、客体的環境が、人間主体の力によって、また人間主体の能動的関わりによっても変更不可能だと捉えられている場合の意味は、実践生態場成立以後、つまり、客体的環境が、人間の能動的関わりで変更可能だと捉えられる場合の意味と異なっている。従って、変更不可能だと捉えられている場合の、例えば（自己を含む人間主体の置かれた）客体的環境即ち世界あるいはそれを構成するモノ、コトの意味は、もし変更可能だとして捉え方が変わった場合には、変容する。

IV. 生態学的意味論における意味特性の規定

以上を踏まえ、生態学的意味論における意味は以下の特性をもつものとして規定される。

1. 意味はアプリアリに与えられない。一定の契機に応じて生成される。
2. 意味は、固定されない。変容する。
3. 意味は、人間主体の諸活動：認識、実践、（主体／客体に対する構え方、捉え方としての）自覚及び意志形成の展開ごとに新たに生成され、変容する。

生態学的意味論の記述・分析の目的は、このような特性を持つ意味の変容の構造・過程の各相を明らかにすることである。次節では、アフォーダンスの認知意味論の捉え返しを通じて意味を「変容するもの」として捉える生態学的意味論のあり方を提示する。

V. 生態学的意味論によるアフォーダンスの認知意味論の捉え返し

ー生態場の視点から見た捉え返しー

1. アフォーダンスの認知意味論

(1) 意味の定義

アフォーダンスの認知意味論において、意味は次のように定義される（以下断らない限り、本多 2006）。意味とは、事物が、（ある）環境の中で、（それぞれの）知覚者に対して持つ意味を指す。より具体的には、環境の中の事物が、知覚者に提供する行為の可能性即ちアフォーダンスを意味ととらえる（p.56）。この場合、環境中で活動する知覚者が、探索活動を通じて、環境中のアフォーダンスを知覚するとされる。

(2) アフォーダンスの特徴

アフォーダンスは、以下の特徴をもつとされる。

1. アフォーダンスは実在する（p.57）。知覚者による主観的構成物ではない。環境の中での事物と、知覚者との「関係」として存在する。
2. アフォーダンスはあくまでそれぞれの知覚者にとっての意味であり、知覚者固有性をもつ。たとえば水は、人間には、呼吸をアフォードしないが、魚には、アフォードする。
3. アフォーダンスは、事物属性固有性をもつ。たとえば50キログラムの体重の人物が渡ることをアフォードする橋は、100kgの人物が渡ることをアフォードしない。また、アフォーダンスは知覚者属性スキル固有性をもつ。たとえば研究室は、整理整頓能力のある人には研究することをアフォードするが、ない人にはアフォードしない。
4. アフォーダンスの知覚には、自己の知覚が随伴する。即ち環境情報と（環境を探索する）自己情報を合わせて獲得する。そこには、環境（世界）知覚と自己知覚の相補性が存在する。また、このようにして知覚される自己をエコロジカルセルフと呼ぶ。
5. 行為の可能性としてのアフォーダンスを知覚者が実際に実現する可能性 effectivity が存在する。それは知覚者の属性とスキルに基づく可能性である（p.57）。
6. 事物をめぐる探索という行為がその事物に対する知覚を可能にし、その知覚が探索活動を可能とする。そこには、知覚と行為の循環が存在する。このような循環の中で発見される、事物のもつ行為の可能性がアフォーダンスである。この循環の成立がアフォーダンスの知覚を支えている（p.60）。

(3) 知覚主体による探索活動とアフォーダンス

知覚主体による探索活動とアフォーダンスには密接な関係がある（p.58-9）。そもそも知覚は受動的なものではなく、知覚者の能動的な運動が大きな役割を果たす。知覚を成立させるのは、感覚刺激の受容ではなく、対象に対する知覚者の側の能動的な行為である（p.47）。

このように知覚において探索活動は重要な役割を果たす。環境の中で活動している知覚者は、その探索活動を通じて環境の中のアフォーダンスを知覚している。この結果、事物がアフォードする行為は、そのアフォーダンスを知覚するための探索活動としての役割を果たす。

以上のように、言語活動の前提をなす知覚において、人間主体が能動的な関わりをなすものとして明示的に捉えられていることが注目される。

(4) アフォーダンスの文化学習

アフォードされる行為を実際に実行しなくても、その可能性は知覚できる。即ちアフォーダンスの知覚は将来の可能性についての情報であり、アフォーダンスの知覚は予見的であるが、その知覚には学習が必要である。人間は事物の意図的なアフォーダンスを文化学習によって学習する。たとえば電話には、会話をするというアフォーダンスのほかにそれをなめる、それで人を殴るなどのアフォーダンスもあり得る。しかし通常は、電話は会話をするものという社会的な規則を文化の中で学習することによって、事物の「意図的なアフォーダンス」(Tomasello1999:84-7)を文化学習によって学習する。

(5) 「捉え方の意味論」における意味観

アフォーダンスの認知意味論においては、意味は以下のようなものとして捉えられる。まず前提として、その表現が何を指示対象としているかを意味として捉える「指示対象意味説」をとらない。次に、「表現解釈の意味論」の意味観をとらない。「表現解釈の意味論」の意味観では、1. 言語表現が、「意味」を担っていることが前提とされる。その上で、2. ある言語表現に対して、どのような解釈が与えられるか、及び、その表現にそのような解釈が与えられるのはなぜかが分析される。3. 意味は、認知主体から独立している。即ち意味の、認知主体からの独立性あるいは、意味が認知主体の外に存在するという点で、意味の外在性を前提とする。これに対して、アフォーダンスの認知意味論においては、次のような「捉え方の意味論」の意味観をとる：1. 話者（認識者・表現者）が、如何なる対象を、どのように捉えて（construe;あるいは認識して）表現するか。2. そのような捉え方を支えている認知のメカニズムはどのようなものか。

2. 生態学的意味論によるアフォーダンスの認知意味論の捉え返し

ー生態場の視点から見た捉え返しー

以上のようにアフォーダンスの認知意味論では、知覚における人間主体の能動的関わりと共に、意味の捉え方においても話者つまり人間主体の能動的な関わりが重要なものとして位置づけられていることが注目される。

(1) effectivity 実現の過程と構造

①アフォーダンスの認知意味論と生態学的意味論における effectivity の捉え方の違い

「環境の中の事物が、知覚者に提供する行為の可能性」としてのアフォーダンスは、あくまでもそれぞれの知覚者にとっての意味であり、その知覚者の属性・スキル固有のものとされる。行為の可能性としてのアフォーダンスを知覚者が実際に実現する可能性

が、effectivity である。その場合、この effectivity を、アプリアリには与えられないもの、固定的でなく、変容するものとして明示的に捉えるか否かが、生態学的意味論と、アフォードランスの認知意味論の根本的な違いである。以下、人間的自然言語に限った上で、アフォードランスの認知意味論と生態学的意味論の意味の捉え方の違いを見てみよう。

第一に、アフォードランスの認知意味論においても、アフォードランスが経験を通じて学習によって獲得されると捉えられている点では、アプリアリには与えられないものとされている。しかしその場合、如何なる契機によって、如何なる過程をたどり、背後にどのような構造があって、変わりうるものなのかは、問われていない。第二に、知覚者は、知覚するもの、認知を受動的にも能動的にも形作るものとして位置づけられてはいる。しかし、認知を超えて、多次元構造かつ能動的な認識や認識に基づく実践の契機をもつものとしては捉えられていない。第三に、行為の可能性としてのアフォードランスを知覚者が実際に実現する可能性が effectivity だとされ、知覚者が可能性を実現するものとして規定されている。しかし、行為の可能性を知覚者自身が、意識的に捉え返し、与えられた行為の可能性のありようを意識的に変更することを視野に入れた能動的な認識や、実践過程に基づく行為の可能性の変容については、明示的には、論じられてない。これに対して生態学的意味論においては、明示的に意味を変容するものとして捉えるばかりでなく、その変容の構造と過程を明らかにすることをむしろ学の対象とする。

以下、生態学的意味論の意味の捉え方に基づく場合、知覚者の属性やスキルが、またそれに付随して可能性としてのアフォードランスとして規定された意味がどのように変容するかを見る。

②「アフガンテキスト」における effectivity、アフォードランス、意味の変容

生態学的意味論の記述・分析の例として「アフガンテキスト」(注)の場合を取り上げる(岡崎 2009d, 2010d)。アフガンの子どもや住民の直面する飢餓に対する農業支援の一環として、日本産のサツマイモの苗をアフガンの地でも育て栽培する試行が重ねられる。当初は、種芋を翌年用貯蔵に失敗が続く。しかし、数々の貯蔵法の試行、観察、改善の実践の末ついに安定した貯蔵法に到達するに至る。

その結果、知覚者としての伊藤さんの属性は、サツマイモをアフガンの地においても生育可能なものとして使用できる能力を伴う者として新たに与えられる。同時に、サツマイモとの「関係」が新たに紡ぎ直される。それに伴って、知覚対象であるサツマイモは、アフガンの住民に食糧、ひいては生存し生きていくことをアフォードするものとして新たなアフォードランス即ち意味が与えられる。他方、伊藤さんの他方の知覚対象である知覚者自身(伊藤)については、自分は、自身(伊藤)はアフガンの住民にサツマイモを生存を支えるものとして生育し、提供できる主体であると言うアフォードランスが与えられる。

以上をもとに「アフガンテキスト」における個別の事物の effectivity、アフォードランス、意味の変容について見てみよう。

1. サツマイモ

アフガンの地においてサツマイモの種芋の貯蔵法が試行・観察・改善・認識・実践されることによって、ここに取り上げられるサツマイモには、新たな effectivity が与えられる。

サツマイモはそれまで日本などアフガン以外の何カ国かにおいてのみ人間に食べ物として機能し、生育するという行為の可能性を与えるものであった。これが、試作以降アフガンにおける可能性として、食糧を自給できるものとする、飢餓からの解放を可能にし、生きる手だてとしての農耕を獲得する行為の可能性をアフォードするアフォードランスが与えられる。そのような規定としての新たな意味がサツマイモに与えられたのである。

2. アフガンの住民

アフガンの住民は戦火によって郷土が荒廃する中、飢餓と冬の寒さで一年に数十万人の餓死、凍死の出る状況にあった。その中で伊藤さんに勧められ、自ら隣人にも呼びかけて、サツマイモをアフガンで育て始める。ここにアフガンの住民は、飢餓に脅かされている当事者として、食料自給のための協働という行為の可能性のアフォードランスを獲得している。アフガンの住民の持つ意味はここで飢餓に対して、あきらめしか持てない存在から、飢餓克服に対する行為の可能性を持つ存在へと変容を示している。

3. アフガンの地

直接的には、サツマイモ、アフガンの住民の与え得る行為の可能性の変容によって、アフガンの地もまた新たな事物、目の飢餓を救う食料としてのサツマイモ、新たな人間主体、サツマイモを育成するという食料生産活動の行為群という可能性を、自らの住民にアフォードする土地という意味を新たに獲得した。

間接的には、「子供に十分に食べるものがない土地」、「緑のない土地」だったアフガンの土地を、飢える心配のない、緑のある土地に変えて行くことのできる未来像をアフォードするものという新たな意味を獲得した。

4. 伊藤和也さん＝知覚者

伊藤さん自身にとって、自分とは、アフガンを飢餓のない、緑のある土地に変えようとする意志を持つ者、そのように変えようとする主体としての実存の可能性をアフォードする主体という意味を持つ者に変容した。自らの手で、サツマイモの貯蔵を可能にし生育して食糧にする方法、そのための他者との協働のシステム、さらにそれらの実現に投じた一石を根づかせようとする意志を持つ実存の可能性をアフォードする主体という意味を持つ者に変容した。

(2) エコロジカルセルフの、環境に対する被与かつ能与性

①人間的自然と、対象的自然の相互交渉的過程としての意味の生成過程

環境と人間は、自然という点から捉え返すと、対象的自然と人間的自然である。その両者の間で行為の可能性を相互にアフォードするとは、人間的自然と対象的自然の相互交渉的過程のもとで意味が生成過程を辿るものとして捉え返すことができる。

②エコロジカルセルフの、環境に対する被与かつ能与性と意味の生成過程

生態学的意味論は、エコロジカルセルフを環境から行為の可能性をアフォードされるという受動的特性、被与性と、エコロジカルセルフ自身もまた環境に対して行為の可能性をアフォードするものという能動的可能性・能与性を合わせもったものとして捉える。即ち、環境から多様な行為を提供されると同時に、エコロジカルセルフである人間もまた、人間の環境を形作る行為をアフォードする存在であるものとして捉える。

能動的可能性、能与性は例えば、乳児は、その外的環境を形作る他の人間である母親に、哺乳、子守歌を歌う、背負うなどの行為の可能性をアフォードする。また、例えば、人間は、その内的環境を形作る卵細胞に対して、それが人間の発生過程において、分割し、胚を形作り、循環器官や呼吸器官の器官を形成する行為をアフォードする。

以上のようなエコロジカルセルフは自己が意図せずしてアフォードする行為と共に、そうすることを意志を以て実現しようとする行為をもアフォードする。エコロジカルセルフである人間が食糧を生産するために、種子をまき、水をやり、肥料を与えることにより、種子に対して発芽し、枝をのばし、葉を茂らせ、花を咲かせ、実をつけるという行為をアフォードする。そうすることを意志を以て実現しようとしてこれらの行為をアフォードするのである。

③意味生成の両主体としての人間の自然と対象的自然

上述のごとく行為の可能性を相互にアフォードするとは、人間の自然と対象的自然の相互交渉的過程のもとで意味が生成過程を辿ることと捉え返すことができる。このコンテキストにおいて意味とは、人間の自然と対象的自然の相互交渉的過程のもとで生成されるという点で、自然による生成物として規定することができる。言い換えれば、言語が、人間即ち人間の自然にのみ限定されたものでなく、自然に普遍的・本質的な存在であることに即応して、意味もまた自然によって生成されるところの「全自然に普遍的・本質的な存在としての意味」として、規定することができる。そして意味の生成の主体は、対象的自然と、人間の自然の両者である。

④人間的自然・対象的自然、両者間の相互交渉的關係のもとにある自己としてのエコロジカルセルフ—人間的自然と対象的自然の間のエコロジー形成と相互一体で実現されるものとしての意味の生成—

以上の点を踏まえて、世界の知覚と自己の知覚の相補性を捉え返すと、その相補性は同時に、アフォードの相補性、及びアフォードの双原因性・双方向性と相互一体的関係のもとにあるものとしてえることができる。

またこれを別の視点から見ると、「環境が人間をそのもとに関係づける」と共に、「人間もまた環境に新たな関係を与える」ものと捉えることができる。即ち対象的自然と人間の自然の間のエコロジカルな関係の生成過程のもとで、両自然間の双方向・双原因のアフォードの提供としての意味生成がなされると捉えることができる。これをさらに対象的自然と人間的自然全体及びそのもとになされるエコロジー形成の視座から俯瞰して捉えると、意味はエコロジーの生成過程と相互一体的過程のもとで生成されると見ることができる。即ち意味の生成とエコロジーの生成は、相互一体的過程である。

⑤受動性の能動性への転化によるエコロジカルな関係の転化に基づく意味の生成

先述のごとく、エコロジカルセルフは、環境から行為の可能性をフォードされる（被与）ばかりでなく、環境に行為の新たな可能性をフォードする（能与）。では、エコロジカルセルフの持つ、環境に対する受動性を能動性に容れさせる契機は何か。これは即ち、現実生態場を実践の生態場に変える人間主体（人間的な自然）の側に形成される契機である。具体的には、それは能動的認識・実践・意志形成／自覚の各契機である。これら一連の契機がエコロジカルセルフの受動性を能動性に転化させる。これら一連の契機によって、エコロジカルセルフの受動性を能動性に転化させることで、人間と環境即ち人間的な自然と対象的な自然の間に新たなエコロジカルな関係が生成されることによって意味は生成されると見ることができる。

(3) 意味の変容の契機としての「として」alsの契機

（認知を含む）能動的認識・実践・意志形成／自覚の生成を媒介的契機として、第一に、対象的世界（客体的世界）における対象物の人間主体による捉え方と、第二に、人間主体自体の人間主体自身による捉え方、即ち、「として捉える」の捉え方（＝「として位置づける」の位置づけ方）は、それら媒介的契機の生成以前と以後で変化する。

この変化を、アフォーダンスの認知意味論の基本諸概念に照らして考えてみよう。アフォーダンスの認知意味論は以下の見方を基本とする。1. 「捉え方の意味論」としての認知言語学の一翼としてのアフォーダンスの認知意味論は、「捉え方」を重視する。2. アフォーダンスの知覚（の獲得）には、学習が必要であり、幼児が環境の中で移動するなどの経験が必要である（p.58,p.59）。社会的規制のもとにある探索活動の経験のもとで「知覚と行為の循環」が生成される（p.5）。3. これら即ち、「何かを知る」と、「何かと関わる」の間に、循環性がある（p.5）。4. その際、「世界の知覚」と、「自己の知覚」の相補性が成り立っている（p.5）。5. 「捉え方」、具体的には、「世界の知覚」のあり方は、人間主体つまり自己による探索活動即ち環境内の移動によって変化する。

生態学的意味論においては、このような人間主体による探索活動として取り上げるものを認知のみに限定しない。能動的認識・実践・意志形成／自覚のすべての契機を探索活動の一環として捉える。別の見方をすれば探索活動を認知の過程のみに限定することなく、能動的認識・実践・意志形成／自覚の過程全体にわたるものとして考える。即ち「捉え方」は、これらすべてに関わる探索活動の過程で、変容しうるものとされる。この結果、「世界の知覚」及び、「自己の知覚」、従ってさらにその相補性の内容は、能動的認識以下のすべての契機のそのつど変容しうる。また、「何かを知る」と、「何かと関わる」、のあり方及び、その両者の循環性のあり方も、それら契機のそのつど変容しうる。これを言い換えれば「として」als捉える捉え方がこれらの契機のそのつど変容することによって、捉えられた結果である意味もまたそのつど変容する。即ち事物の意味の変容とは、これらの契機のそのつどその事物を「如何なるものとして」捉えたかにおける、「捉え方の変容」に伴う規定の変容、としてひとまず言うことができる（詳しくは次節参照）。

(4) 捉え方の意味論の構造と過程

①「として」にかかわる構造と過程の二つの次元

生態学的意味論における捉え方の意味論は、認知／知覚にかかわる構造・過程にとどまらない。即ち、認識において対象を「として」捉える捉え方、実践において対象に「として」にかかわる関わり方の構造・過程の次元をもつ。その上で、さらに、現実生態場を構成する、人間主体と対象的世界における客体という二つの実体間の関係構造の捉え方、被投から投企への変容をもたらす、現実生態場を実践生態場に引き上げる契機としての人間自らに対する自覚において、自己を「として」捉える捉え方、また対象的世界に対して「として」構える意志の構え方それぞれにかかわる構造・過程の次元を持つ。

②「～として規定」の変容としての意味の変容

このような構造と過程の次元のもとで、意味の変容とは、意味の対象となる事象を「として捉える」「として関わる」「(自己を)として捉える」「(世界に対して)として構える」のそれぞれにおける「～として」の～部分をどのように規定するか、即ち「～として規定」(als 規定)における～部分の変容として規定される。具体的には、例えばサツマイモを、貯蔵法の試行・改善を通じた観察・認識及びアフガンの地における育成という実践を経て、「アフガンでは食糧でない植物」として捉えられるという「～として規定」に基づく意味から、「アフガンの住民を飢餓から自ら救い出し、食糧生産活動という行為の可能性を与える植物」として捉えられる、という「～として規定」の変容を通じて新たな意味への変容が示される。

(5) 意味の生成

以上に基づき、意味は、生態場における認知・認識・実践・自覚／意志形成の過程的契機を通じた「～として規定」によって生成される。それは、人間的自然による認識・実践を通じた、人間的自然と対象的自然の形作る現実生態場における、人間主体と対象的世界における客体という二つの実体間の関係、構造の捉え方の変容の過程で、段階的に生成される。

Ⅵ. 逆規定に基づく意味生成：

主体的意味論としての生態学的意味論—アフォーダンスにおける意味論の巨歩を進める—

上の「アフガンテキスト」分析において展開された生態学的意味論に基づく、実践生態場の生成による意味の新しい生成という捉え方は、現実生態場が実践生態場に変わることに伴う新しい構造および過程を持つものである。即ち、主体の1. 捉え方・2. 関わり方・3. 生き方の変更による「として」の変更に基づく、世界とその下にある自己、及び他者の意味変容の過程と構造を示すものである。

1. アフォーダンス認知意味論における「主体的」の創出

アフォーダンスの認知意味論は、ある表現が何を対象としているかを意味として捉える「指示対象意味論」や、言語表現が意味を担うものであり、意味を「認知主体の外に存在する」とする、意味の外在性を前提として解釈する「表現解釈の意味論」を「客観

主義的」意味論であるとして、これまでのこれら主体ぬきの意味論の壁を打ち破らんとするものであった。即ち、同理論は、知覚主体が環境の中における事物と知覚者との「関係」であるアフォーダンスをベースとして、知覚主体の外にある環境の中の対象に対する知覚下の能動的探索活動に基づきこのアフォーダンスを知覚すると捉える。そしてその過程で、主体がいかなる対象を、どのように捉えて表現するかを分析することで開示されてくるものを意味であるとする。このようにして同理論は、明確に主体を据えた主体的な意味論を創出するものであった。生態学の意味論は、このようにアフォーダンスの認知意味論によってなされた意味論上の巨歩を、さらに進める意味の構造および過程を提示するものである。

2. 生態学の意味論における「主体的」の構造—逆規定の捉え方—

生態学の意味論における「主体的」の構造は、人間主体の側のみでなく、また「客観主義」のみでなく、主・客の相互交渉的過程と構造を不可欠とした上での「主体的」である。このような「主体的」の意味するところは、主体としての人間が、主客の相互交渉のうち、客体である人間的自然を含む客体的自然としての現実総体の側から与えられるものに対して、これを変更可能なものとして捉えて変更する対象として関わることを通じて果たされる主体の側のあり方である。即ち、実践生態場の生成に伴って生成される生態学の意味の第三段階の生成の「根源的契機」をなす(Ⅲ 1. (3) 参照)内容に関わるものである。

このような生態学の意味論における「主体的」のあり方を基礎づけるものが逆規定の捉え方である。即ち、客体によって与えられる所与のことの受け身の受容および、それに基づく「真理」、「現実」の受容として意味を捉えることを超え、人間的自然を含む環境の自然、対象的自然のなす現実総体としての客体を、主体の側から捉え返し新たなものとして規定し直す捉え方である。言い換えれば、人間主体が、「現実総体としての客体が人間主体を規定したものを受け入れる」、即ち「客体による主体に対する規定を、主体の側から受け入れる」でなく、「客体による主体に対する規定を、主体の側から逆に規定し直す」という点で逆規定をなすものである。

これは、言い換えると、被投を能投企に転ずることによる新たな意味の生成の構造と過程を内容とする「主体的」という主体の側のあり方をも示す内容のものである。即ちアフォーダンスの認知意味論が、「自然環境・社会環境としての環境と主体との関わり」の領域に踏み込んだ巨歩を、生態学の意味論は、逆規定の捉え方を通じて、さらに根源的な構造および過程に深めて展開するものである。

3. 「過去および現在から投げ込まれてくる現実を規定し直し、未来に向かって投げかえす」

生態学の意味論においては次の捉え方を前提とする。現実生態場において人間主体は、自己の直面する現実から規定されて、自己及び自己がそのもとにある人間的自然を包摂する客体的自然によって形作られる現実の両者と与えられる。この時点においては、眼の前の現実是被規定相として与えられる。

これに対して、人間主体によって、「今、ここ」の現実の能動的認識および、それに

基づく実践がなされ、その認識・実践がその下での過程と、この被規定相としての現実を逆に規定し返す過程が形成されるに至るとき、そのような逆規定の下に、一方で新たな世界と、他方でそれと相即的にそのような逆規定をなす人間主体としての自己が生成される。その下で、同時に、規定し直し新たに創造する対象として現実を捉え返す被与の能与への転化がなされる。人間主体による現実に対する関わりの点からみると、これは被投の能投企への転化によって、「過去および現在から投げ込まれてくる現実を規定し直し、未来に向かって投げかえす」に転化することである。また、人間主体自身においては、そのような逆規定をなし、未来に向かって投げ返す存在としての自覚の過程と、それが実現しようとする意志形成の過程が統一的に生成される。

4. 過程的実現をなして形成される逆規定

逆規定は、一挙的・一回的な成果としては形成されない。それは過程的実現の形で形成される。即ち、当初の合わせて三段階の意味生成の形作る自己と世界の意味の変容が端緒をなす「逆規定の結節点」を「転回点として展開される過程」である。「アフガンテキスト」はこの逆規定の結節点形成の過程を鮮明に示すものとして呈示されている。

この結節点を転回点として次の螺旋的展開相が生成される。即ち眼前に示されていた世界のモノ、コト、及びそれに対していた自己の意味像は新たに変容した相を以って開示され、従前の被規定相は、新たな次元の立ち位置、トポスからなされる能動的認識、実践の対象として開示される。

但し、能動的認識・実践・意志／自覚形成の三段階のなす円環は、閉じた円環として当初の立ち位置、トポスに回帰するのではない。三段階の終点毎に形成される結節点を契機に、逆規定に基づく意味生成は新たな次元の立ち位置、トポスに立ってなされる。これにより、先立つ過程は螺旋的に新たな次元を形成し始める展開過程へと引き上げられ、開かれた円環即ち螺旋的展開の相をなして形成される。

5. 現実のもとにある自他の逆規定を契機とする主体的意味論

被規定相の捉え返しを通じて、それを逆規定し、新たに逆転相を生み出してゆくその中で、眼前の現実を逆転して実現しつつある主体としての自己及び、他者により形作られてゆく新たな現実相を捉えるとき、自己・他者・およびそれを包摂する世界の意味はそのつど開示されてゆくものとして生成される。逆規定を契機とするこの意味の開示の相を明らかにすることを目指すものが、主体の契機を必須とするところの主体的意味論である。中でもそれは、逆規定、即ち眼前の現実およびその下にある自己を、自己主体を起点として革（あらた）め変えるという意味での変革の契機をもつ主体的意味論である。生態学的意味論は、この、主体による、現実の下にある自他の逆規定に基づく変革の契機を内蔵し、自己・他者・およびそれを包摂する世界の意味の開示されてゆく相を意味の枢要として位置づける主体的意味論として展開されるものである。

Ⅶ. 結語

本論は、第一に、生態学的意味論の定義、構成、根本概念である意味の生成及び意味

の規定を提示し、第二に、アフォーダンスの認知意味論を取り上げ、そこで意味はどのように従来の意味論を超えた地平で新たに捉えられているかを見た。その上で、生態学的意味論に基づき、生態学的意味論の根本概念の一つである生態場の視点からアフォーダンスの認知意味論を捉え返した。その上で、第三に、これら二点を踏まえ逆規定の捉え方を契機とする主体的意味論としての生態学的意味論について考察した。

注 生態学的意味の生成の分析対象としたアフガン農業支援者伊藤和也さんの支援団体ベシャワール会への志望理由書、農業支援開始後2年と3年の農業支援報告書から成るテキスト群を指す（詳細は岡崎 2009d, 2010d 参照）。伊藤さんは上記の報告書執筆の半年後にアフガングリラによる襲撃に際して亡くなっている

参考文献

- Haugen, E. (1972). *The ecology of language*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Haugen, E. (1974). *The ecology of language*. In Anwar Dil (Ed.), *The ecology of languages: Essays by Einar Haugen* (pp. 325-339). Stanford: Stanford University Press.
- Haugen, E. (1985). The language of imperialism: Unity or pluralism. In N. Wolfson, & J. Manes. *Language of inequality* (pp. 3-17). Amsterdam: Mouton.
- Hornberger, N. H. (2002). Multilingual language policies and the continua of biliteracy: An ecological approach. *Language Policy*, 1, 27-51.
- Hornberger, N. H., & Skilton-Sylvester, E. (2000). Revisiting the continua of biliteracy: International and critical perspectives. *Language and Education: An International Journal*, 14(2), 96-122.
- Kaplan, R., & Baldauf, R. (1997). *Language planning from practice to theory*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Kaplan, R., & Baldauf, R. (1998). The language planning situation in ... *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, vol. 19, No. 586.
- Lidicoat, A.J. and Baldauf, R. (2008) *Language Planning and Policy*. Clevedon UK: Multilingual Matters Ltd.
- Mufwene, S. (2001). *The Ecology of Language Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press
- Mühlhäusler, P. (1992). Preserving languages or language ecologies: A top-down approach to language survival. *Oceanic Linguistics* 31(2), 163-180.
- Mühlhäusler, P. (1996). *Linguistic ecology: Language change and linguistic imperialism in the Pacific region*. London: Routledge.
- Mühlhäusler, P. (2000). Language planning and language ecology. *Current Issues in Language Planning*, 1(3), 306-367.
- Nettle, D. (1999). *Linguistic diversity*. Oxford: Oxford University Press.
- Ricento, T. (2000). Historical and theoretical perspectives in language policy and planning. *Journal of Sociolinguistics*, 4(2), 196-213
- (2006) *An Introduction to Language Policy*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Tomasello, M. (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*, Harvard University Press. Cambridge.

MA.

伊藤和也・進藤陽一郎・山口敦志・高橋修 (2008) 「2007 年度農業計画報告」ベシヤワール会会報 No.95. No.96

岡崎敏雄 2005 「言語生態学原論—言語生態学の理論的体系化—」『共生時代を生きる日本語教育』凡人社、503-554

—— (2009 a) 「言語生態学と言語教育—人間の存在を支えるものとしての言語—」凡人社 1-264

—— (2009 b) 「持続可能性教育としての日本語教育—課題の克服とその具体的形態—」『筑波大学地域研究』31.1-16 筑波大学

—— (2009c) 「持続可能性教育としての日本語教育のデザイン—生態学的リテラシーの育成—」『文藝言語研究 言語篇』54.1-16 筑波大学

—— (2009 d) 「生態場における生態学的意味の生成—第一、第二段階の生成—」『筑波応用言語学研究』16.1-14 筑波大学

—— (2009e) 「持続可能性教育としての日本語教育の学習のデザイン—類個の育成—」『文藝言語研究 言語篇』56. 73-92 筑波大学

—— (2009f) 「人間生態学としての言語生態学に基づく持続可能性言語教育の理論と実践」『持続可能性の内容重視日本語教育における意識分析に基づく学習のデザインの基礎の研究』1-235 平成 19-21 年度科学研究費補助金研究 課題番号 19652045 研究代表者岡崎敏雄

—— (2010a) 「言語生態学に基づく持続可能性日本語教育方法論—生存を主題とする学習のデザイン—」『文藝言語研究 言語篇』57. 75-121、筑波大学

—— (2010b) 「持続可能性教育としての日本語教育の学習のデザイン—教室活動・シラバスデザイン・教師の役割—」『筑波大学地域研究』31.1-24 筑波大学

—— (2010c) 「持続可能性の内容重視日本語教育における意識分析に基づく学習のデザインの基礎の研究」1-157 平成 19-21 年度科学研究費補助金研究 課題番号 19652045 研究代表者岡崎敏雄

—— (2010d) 「生態学的意味の生成—第三段階の生成—」『日本語と日本文学』50.1-17 筑波大学

—— (2010e) 「持続可能性教育としての日本語教育」『日本語教育研究への招待』くろしお出版 3-17

—— (2010f) 「言語生態学の相互—体的学としての人間生態学の構築—人間生態系前史としての自然生態史の生態学的記述—」『筑波応用言語学研究』17. 1-16 筑波大学

—— (2010g) 「持続可能性日本語教育の学習のデザイン—雇用—食糧軸のライフラインリスク像育成のための学習のテキストシラバスデザイナー—」『筑波大学地域研究』32. 136-159

—— (2010h) 「言語生態学に基づく日本語教育学原論—意味の生態系育成としての言語教育—」『言語学論叢』オンライン版 3 (通巻 29) 1-17 筑波大学

—— (2011a) 「持続可能性日本語教育の学習のデザイン—雇用—食糧軸のライフラインリスク像育成のための学習のテキストシラバスデザイナー—」『筑波大学地域研究』32. 137-156. 筑波大学

—— (2011b) 「言語生態学研究方法論」『外国語学研究』12. 101-110 大東文化大学

—— (2011c) 「言語生態学に基づく海外年少者日本語教育原論」『語学教育フォーラム』

第 21 号 5-22 大東文化大学

—— (2011d) 「言語生態学に基づく中国語母語話者年少者に対する日本語教育方法論 I」『水門』第 23 号 1-10 勉誠出版

—— (2011e) 「言語習得・保持研究の再構築と非母語話者年少者日本語教育」『日本語と日本文学』52.13-26 筑波大学

—— (2012 a) 「言語生態学と日本語教育の課題—中国語母語話者への日本語教育の観点から—」『日本

- (2012b)「言語生態学の相互一体学としての人間生態学の構築—自然生態系と自然言語生態系の二系成系構造成過程の生態学的記述—」『筑波応用言語学研究』18, 1-14 筑波大学
- (2012c)「生態学的意味論原論」『言語学論叢』オンライン版5（通巻31）1-17 筑波大学
- (2012d)「言語生態学研究方法論(2)—保全・育成のための研究方法—」『外国語学研究』13.100-109 大東文化大学
- (2012e)「言語生態学に基づく日本語教育—自然生態学的リテラシーの育成—」『筑波大学地域研究』33, 191-207 筑波大学
- (2012f)「言語生態学に基づく中国語母語話者年少者に対する日本語教育方法論Ⅱ」『水門』24, 86-98 勉誠出版
- (2012g)「言語習得・保持研究の再構築と非母語話者年少者日本語教育Ⅱ」『日本語と日本文学』53.13-26 筑波大学
- 小田珠生(2010)『言語少数派の子どもに対する父母と協働の持続型ケアモデルに基づく支援授業の可能性—言語生態学の視点から—』博士論文 お茶の水女子大学
- 佐藤真紀(2010)『学校環境における言語少数派の子どもの言語生態保全—「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」の可能性—』博士論文 お茶の水女子大学
- 鈴木（清水）寿子(2010)「持続可能性教育としての共生日本語教育実習の可能性—言語生態学的内省モデルの提案—」博士論文 お茶の水女子大学
- 張瑜珊(2012)『研究生のための持続可能性アカデミック日本語教育—言語教育専攻の大学院生らの教育実践を通して—』博士論文 お茶の水女子大学
- 半原芳子(2012)『持続可能な多言語多文化共生社会を築く「共生日本語教育」の可能性』博士論文 お茶の水女子大学
- 房賢嬉(2011)『持続可能性音声教育を目指すピア・モニタリング活動の可能性—対話を媒介とした言語生態の保全・育成を通して—』博士論文 お茶の水女子大学
- 平野美恵子(2011)『共生日本語教育実習における実習生間の言語共生化過程の研究』博士論文 お茶の水女子大学
- 本多啓(2006)『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象—』東京大学出版会
- 穆紅(2010)『言語少数派の子どもの継続的認知発達保障—生態学的支援システムの構築に向けて—』博士論文 お茶の水女子大学
- 楊峻(2010)『中国の大学の日本語専攻主幹科目へのグループワークの提案—言語生態の保全の観点から—』博士論文 お茶の水女子大学